

ビルマのタマイン（「史書」）について

奥平龍二

はじめに

ビルマ(ミャンマー)には、歴史文献として、いくつかのジャンルがある。その中で、主要文献はタマイン(Thamain)とヤーザウイン(Yazawin)である。本稿は、この二つの歴史文献のうちタマインに焦点を当て、特に従来「史料」として余り関心を呼んでこなかったゼーディードー・タマイン(Zedi-dah Thamain)を取りあげる一方、タマインの性格とその位置付け、および今一つの重要な史書であるヤーザウイン(「王朝史」との関係等について考察することを目的とする。

なお、歴史関係文献としては、以上の二つのカテゴリー以外にも、韻文で書かれた、エーヂン(E-jin, 史謡)、モーゲン(Mawgun, 叙事詩的史記)、散文で書かれたものとして、アメインドー(王などの布告)、サードン(Sadan)やフマッタタン(Hmatan)などの記録文書もあるが、「タマイン」を問題にする本稿では特に言及しないでおく。

一 タマインについて

1. 語源

「タマイン」という言葉の語源にはいくつかの説がある。一つは、パリー語 Samut 語源説である。Samut の語義についてはいくつかのパリー語辞典によれば、(1) 同意、選出、許可「水野」R.C. Childers J (2) 聖伝書、伝承でサンスクリット語の Smṛti に相当する「水野」、(3) 命名すること、呼称すること「U Hout Sein」の大体三つの意味に分類される。パリー語系 Tamouti はパリー語 Samut のビルマ訛音であり、また、ビルマ語の Thamout (命名する、呼称するの意) は Tamouti から派生した言葉であり、また、ビルマ語の That-mat-thi (認める、名付ける、規定するの意) は同系列の言葉であり、これは、本来、「寺領を境界を敷いて他の土地と区別すること」の意味であると考えられている。^三「タマイン」の語源説の一つは、パリー語 Samasa で、パリー語辞典によれば、結合、省略「水野」Childers, U Hout Sein の意である。これは、上ビルマ、ザガインの著名な仏塔の歴史によれば、「事物を集め要約して叙述することをパリー語で Samasa、ビルマ語で Thamain と呼ぶ」[KZT 1991:3] の説明を行っている。三つには、ビルマ語で「命名された」(denominated) (M-E-P) U Hout Sein を意味する Thampain から Thampain: ငုံ့ မှပိုင် Thamnain (Thamain) となったとする説である。

2. 「タマイン」の定義

では、「タマイン」とはどのように定義されるであろうか。諸々の辞典によれば、その定義は以下の通り七つに纏めることができる。すなわち、(1) (イ)「国家、民族、建造物、人物等の過去の経緯」(ロ)「かかること」を系統的に研究する学問「M-M.D, Ministry of Education」(ニ) a history, chronicle[M-E. -RBE] (三) history, legend[M-E.D Ministry of Education], (4) (イ) a history of Pagoda, and also (ロ) applied to other histories[たぐいは Pitakat Thamaing, Myo-ywa Thamaing, Myanma Thamaing-yazawin など]、(5) 「歴史」「伝」[B-C.D, 陳 孺性など]、(6) 「連続して記録される書物を意味する。仏塔、窟(院)、僧院、参道、仏塔の休憩所(Sahsun)、説法堂、橋梁、傑物、特別な事柄等について、散文ないし韻文で叙述されているもの」[MSK.33]および(7)「仏教建造物に関することや、町村、国、民族、言語、文学等に関することが発生してきた様にはじまり、現在体験している事々の様子を明確に四行詩などの韻文や散文文体で記録された種類の書物」[KMWZ]序文 (Ka)である。

3. 「タマイン」用語の使われ方

「タマイン」という用語は、用途に応じて、いくつかの使われ方がなされる。一つは、名詞＋「タマイン」の形を取るもので、Sape (文学) + Thamaing (歴史) = Sape Thamaing (文学史)、Zedi-daw (御仏塔) + Thamaing (歴史) = Zedi-daw (御仏塔史) な

ど、「一ー史」として使われるものである。二つには、「タマイン」＋名詞の形をとるもので、Thamaing (歴史的) + Pounbyin (説話) = Thamaing Pounbyin (歴史的説話)、Thamaing (歴史的) + Thutehana (研究) = Thamaing Thutehana (歴史研究) など Thamaing を「歴史的一ー」と訳されるものである。三つには、「タマイン」＋動詞の形を取るもので、Thamaing + Tin (置く) = Thamaing Tin (出来ごとを記録する)、Thamaing + Win (入る) = Thamaing Win (歴史に残る) などである。

4. 「タマイン」文献の形態

次に、「タマイン」文献の形態として、(イ)材料の種類、(ロ)使用言語、及び(ハ)文体について述べる。(イ)については、石碑文 (Kyauk-sa)、貝多羅文書 (Pe-za、一般に貝葉と称される)、折り畳み写本 (Parabaik)、及び刊本 (Pon-hmeik Saouk) の概ね4種類に分類される。これらの内で、石碑文については、例えば、モン語、パーリ語のビルマ語逐条訳 (Nissaya) で刻まれたダンマゼーデー王碑文 (Dhammazedi Kyauk-sa, 1485 A.D.) があり、内容は、シエエダゴン・パゴダ縁起と歴代王の功德行為を記述したものである [EPB IV No. VIII:35-43; STT 1963: 138-140 参照]。また、貝多羅文書については、例えば、Yadanathinkamyo Thamaing [1215 M.E. = 1853 A.D. 写本] があり、これはビルマ暦一ー五年 (＝西暦一七五三年) 造宮のコンバウン朝ビルマの王都、ヤドナティンガ (＝シエボー) の歴史を叙述したものである。折り畳み写本については、貝多羅文書に刻む前にド

ラフティングに使用したり、また地方史や地方文書において頻繁に使用された。刊本については、ビルマに印刷術が導入され、刊本が普及しはじめる一九世紀前半まで主たる書物の役割を果たしていた貝葉や折り畳み写本などが印刷に付されるようになった。例えば、*Pyi Shwe - hsandaw Thamaing* (1964 Yangon: Hanthawaddy Press) は、*ビエー* (ブROOM)・*シユエー*・*サンダー* 仏塔史 (1242 M.E. = 1880 A.D. 貝葉写本) を印刷刊行したものであり、今日、同種の仏塔史の刊本は多数出版されている[参考文献三参照]。

(ロ) 使用言語については、ビルマ族は、一二世紀後半のナラパティスードウー王治世に先住民族で高度なスリランカ系の上座仏教文化を受容していたモン族の文化から脱皮し、言語もモン語にかえてビルマ語を本格的に使用するに至った。文献的には、ビルマ文字を使用する純パーリ語、パーリ語のビルマ語による逐条訳形式 (*Nissaya*) 及び、純ビルマ語の概ね三種類がある。また、文体は、散文体と韻文体に分かれるが、前者はザガビイン (*Zagabyin*) またはザガビエー (*Zagabye*) とよばれる。後者は、*Gabya Linga* (韻詩)・*Mawgun* (叙事詩) や *Pyo* (四行叙事詩) などがある。それらの例として、*Kyaungdaw Ya Thamaing* の中に *Gabya Linga* と *Mawgun* が含まれている。 *Pyo* の例としては、*Mahamyatmuni Thamaing Pyo* 等がある。

二 ゼーディー (ドー) タマイン (〔御〕仏塔史)

1. ゼーディー (Zedi-daw) の種類

「ゼーディー」 (*Zedi*) は、パーリ語チエーティヤ (*Cetiya*, サ

ンスクリット語の *Cetiya* に相当) のビルマ語訛りで、本来「尊敬すべきもの」[MSK III: 1956: 426] の意味であり、「塔廟」のことである。ビルマ語では、仏陀、僧侶、神、王などの意味のほか、仏塔の意味でも使われる *パヤー* (*Hpayā*) と対で使用され、*パヤー・ゼーディー* とも呼ばれる。このゼーディーは、ビルマの場合、次のような四つの種類に分類される。即ち、(イ) *ダトウ・ゼーディー* (*Datu Zedi*: 仏舍利、仏髪、仏歯など仏陀の身体の部分へ聖遺物✓を祀ったパゴダ)、(ロ) *パリボーガ・ゼーディー* (*Paribawga Zedi*: 菩提樹と共に、仏陀の聖具を納めたパゴダ)、(ハ) *ウッディッタカ・ゼーディー* (*Uddethaka Zedi*: 仏陀の無量の御徳を偲び、目標とすべき仏陀の聖像を安置したパゴダ) 及び (ニ) *ダンマゼーディー* (*Dhamma Zedi*: 貝葉、金板、銀板、などに刻まれた聖典を包蔵したパゴダ) の四つである [MSK III: 1956: 426 参照]。

2. ゼーディー (ドー)・タマインとその内容

「タマイン」のジャンルに属する文献で、これまで、その存在がよく知られながら、いわゆる歴史文献としてはあまり注目を集めてこなかったものに (*パヤー*) *ゼーディー*・*タマイン* (*Hpayā Zedi-daw Thamaing*) がある。ビルマ全国各地には、いたるところにパゴダ (仏塔) があり、その主だったパゴダには、それぞれの建立の由来を語る「仏塔縁起」 (*Zedi-daw Thamaing*) がある。これらの「史料」も、伝統に従って、碑文、貝葉、折り畳み写本及び刊本の形で現存する。それらの内で刊本として出版されているものの大半は、単に仏塔建立の由来だけを記述したのではなく、パゴダの今日までの歴史に加え、以下のよ

うな様々な情報も網羅されており、「タマイン」が単に「縁起」の意味だけではなく、「歴史」の意味も含められていることが解る。
 [参考文献二 奥平一九九四：十一 参照]
 上記の「ゼーデー(ドー)・タマイン」の内容を纏めるとつぎのようになる。

(イ) 釈迦在世時代からその聖髪を祀る諸々の仏塔の建立と信仰、パリボーガ・ゼーデー(「精舎仏塔」)、チードーヤー・ゼーデー(「仏足跡仏塔」)などの仏塔の建立と信仰、釈尊入滅後のダートウ・ゼーデー及びウッディッタカ・ゼーデーなどの仏塔の建立と信仰の経緯。

(ロ) インドのパータリプトラのアショーカ正法王治世における八万四千の仏塔建立とビルマ全国各地における仏塔建立の経緯。

(ハ) 仏教の守護と繁栄を願うビルマの諸王による功德行為としての仏塔の建立・寄進、ドウタバウン (Duttabaung: ビュー、タイエーキッターヤー建国王) からデーイーボー (Thibaw, コンバウン朝最後の王) に至る歴代王による夥しい仏塔の建立及び寄進の事実。

(ニ) 「仏塔縁起」(Zedi-youkpa-daw Thamaing) 以外に、デーピンカラ (Dipankara: 「燃灯仏」、過去二四仏の第一番仏) 及びゴータマ・ブッダ(釈尊)の仏伝、仏教史 (Thathana Thamaing)、タイエーキッターヤー史、スリランカ史書である

デーバヴァンサ (Dipavamsa: 「島史」) 及びマハーヴァンサ (Mahavamsa: 「大史」) 等に関する記述。

(ホ) 人間のみならず、ナツ(精霊・神)、ビャマー・ミン(「梵天」)、ダジャー・ミン(「帝釈天」)、ガロン・ミン(「ガルーダ」)等が参加して仏舍利・仏髪の奉納に協力する経緯。

(ヘ) 仏舍利塔の御威力、仏陀の御光、仏陀による御威力の具備、天空へ飛ぶことの出来る超能力などの仏陀の偉業に対する畏敬と称賛。

(ト) 「時代の経過と共に」、「仏塔史」への新しい記録の付加。刊本の時代になって、仏塔の改修、地震による破損の記録、敷地内の建造物や宝物殿・博物館等に関する事、梵鐘や碑文の解説、仏塔財産リスト、仏塔管理委員会 (Gawpaka Ahpwe: 在家者で構成) メンバーリスト等の様々な情報の掲載。[参考文献三 「仏塔史」、Hla Thamein 1968 等参照]

3. 史料の価値

以上みた通り、「ゼーデードー・タマイン」は、古来、碑文、貝葉及び折り畳み写本の形で、また、近代以降は刊本の形で現存するものは少なくない。一般論として、特に、初期の、いわゆる「仏塔縁起」の文献は「伝承」が中心で、史実の信憑性が高いとは言いがたい。しかし、後代、「仏塔縁起」に付加されたいわゆる「仏塔史」は、特に著名な仏塔の歴史は、時の権力者である国王をはじめ、王族や財力ある富豪が仏塔の建立や修理・

改築・拡張などを行ってきた経緯もあり、具体的年月日の記録されたものもあり、「王朝史」や「王の布告」(バイン・アメインドー・ピヤンダン: *Bayin Ameidaw Pyandan*)などと照合することによって「史料」として活用できる可能性も秘めている。ただし、後代の編者が、信頼すべき史料に必ずしも依拠せず、依然として「伝承」に頼って情報を付け加えていった場合には史料価値は大きく低下すると言えよう。

三 ビルマ語史料における「タマイン」の位置付け

1. 「ヤーザウイン」(「王朝史」)との関係

「ヤーザウイン」とはパーリ語ラージャヴァンサ(*Raja Vamsa*)のビルマ語訛りである。諸々の辞典によれば、「ヤーザウイン」とは、「王朝の出来ごとに関する文献」[B-B.D Ministry of Education 1980], "chronicle of kings: history" [M-E.D 1993], "a history of kings, civil history" [B-E.D Judson 1966], [田]転王紀(転義)歴史[現今称「歴史」為 *Thamaing* 陳儒性 1962]あるいは、「国民の出来事よりも支配する国王とその周辺のことを中心に叙述された書物」[MSK Vol. 10: 322]と定義されている³⁾。即ち、簡潔に表現すれば、歴史文献のうち、王を中心に叙述する王朝変遷の歴史であり、王統史[原田・大野 1979]である。従って、先にみた通り、「タマイン」が歴史的には王統と関わりの無い、一般的な歴史叙述であり、その内容は、伝承、仏塔縁起及び仏塔史、仏教史、地方史、民族史、戦史、文学史、文献史、法律史、経済史、建築史など国王とその周辺を除く民族のあらゆる出来事を対象にし多岐

にわたっているのと対照的である。ここに、ビルマの歴史文献として、「ヤーザウイン」と「タマイン」という二つの大きな流れがあることが解る。他方、「ヤーザウイン」と「タマイン」という二つの呼称を併せた「ヤーザウイン・タマイン」という表現を用いた書物が近・現代の書物の中で使用されていることがある。例えば、*Yāngon Yazawin Thamaing* (ヤンゴンハ市V史) *Patheingyi Yazawin Thamaing* (パテインハ市V史) などがこれに当たる。この表現は、ヤンゴンやパテイン(＝バセイン)の古い時代のことを「ヤーザウイン」、新しい時代のことを「タマイン」と定義して併用したと考えられる。あるいは、時に、「ヤーザウイン」と「タマイン」の区別が付きにくい場合に両方の表現を併せ使用するということも考えられる。

2. 近代歴史學用語としての「タマイン」の採用

では、一九世紀末、王朝が崩壊した後、植民地時代、さらに日本軍占領期を経て、独立後現代に至るビルマにおいて、「ヤーザウイン」と「タマイン」という表現はどのように扱われ使われてきたのであろうか。また、我々が一般的に近代歴史學に基づいて記述される歴史、あるいは、大学の「歴史学科」とか近代的手法による「歴史研究」といった表現に対してどのようなビルマ語表現が用いられてきたのであろうか。

日本軍占領期に「ビルマ国史」を書いたウー・バ・ニユン(*U Ba Nyunt*)は、その著 *Myanma Naing-gan Thamaing Ache-pya-Japan-hkit* (「基礎ミヤンマー国史—日本時代—」)において、「ヤーザウイン」という表現は扱う範囲が狭いとの理由から「タ

「マイン」という表現を用いて一國史を著述している。また、独立（一九四八年）後、著名な歴史学者 ボー（フム）・バ・シンは、*Myanma Naingan-daw Thamaing*（『ビルマ国史』一九六三）を著わしたが、ビルマ通史に「タマイン」を採用している。また、独立後のビルマ文学界で指導的役割を果たし、画期的な王朝文学史を編んだ国文学者ウー・ペー・マウン・ティン（U Pe Maung Tin）は、その著 *Myanma Sape Thamaing*（『ビルマ文学史』一九六五）において、王朝時代の文学史に対して「タマイン」を使用している。近代歴史學にいう「歴史」の用語、あるいは、今日の意味で使用されている「歴史学科」や「歴史研究」にいう「歴史」の用語として、「タマイン」が採用されたが、その背景にウー・ペー・マウン・ティンの大きな影響力があったと言われる^④。

他方、現代ビルマを代表する歴史学者タン・トゥン博士は、「タマイン」という呼称を聞くと、シュエナッタウン・タマイン、チャイティヨウ・タマインなど、ナツの歴史、秘宝史、仏塔史、等を想起するので、好まない者もいる[Than Tun 1964 序文：6]と指摘して、近・現代史にいう「歴史」に対するビルマ語の用語として、「タマイン」ではなく、「ヤーザウイン」を使用することが望ましいとの見解を暗に示している。いずれにせよ、「タマイン」の使用によって表現された「ビルマ国史」の呼称は、*Myanma Yazawin* から *Bama Naingan Thamaing* を経て *Myanma Naingan Thamaing* へと変遷してきたことが指摘されている[Than Tun *ibid.*]

3. タイとの比較的特徴

ところで、以上のような「タマイン」と「ヤーザウイン」というビルマの歴史叙述方法の大きな二つのジャンルに対して、隣国タイの事情はどうであろうか。タイでは、伝統的史書に「タムナーン」(*Tamnan*)と「ボンサーワダーン」(*Phongsawadan*)の二つの異なった伝統があり、前者は「仏教史」、後者は「王朝史」であるという[参考文献二 石井一九八四：二二]。従って、前者の主たるモチーフは仏教であり、後者は基本的に王朝の歴史である点で、仏塔史を基本とする「タマイン」と歴代王の編年史である「ヤーザウイン」の関係に類似している。他方、タイでは、「タムナーン」と「ボンサーワダーン」という伝統的歴史記述の二つのカテゴリーとは別に、「近代的歴史學の方法に基づいて記述される歴史」として「プラワティサート」(*Prawatsat*)という用語が存在するという[*ibid.*]。この点で、ビルマがそのための用語を有せず、現代まで、「タマイン」という伝統的歴史記述の用語をもつて代用し、一定の定着は見せているものの、タイのように別の用語を造語しない限り、そのことに起因するある種の不便さは、今後も避けられないであろう。

おわりに

以上、ビルマの伝統的歴史記述の二つのカテゴリーのうち、「タマイン」に焦点を当て、もう一つのカテゴリーに属する「ヤーザウイン」との関係を通じて、その文献的性格を探った。「タマイン」は「ヤーザウイン」に比べ、取り扱われる範囲が広範で、多岐にわたってきた印象が強い。他方、「ヤーザウイン」

という表現は飽くまで、王朝史という伝統的歴史記述の方法としては有益な方法であったと思われるが、王朝崩壊後の、近現代には馴染みにくい用語と考えられる。タイのような「プラワティサート」という用語を考案しなかったビルマの場合は、多少の異論はあったにせよ、かなり自然な形で「タマイン」が近代歴史学の方法に基づいて書かれる「歴史」も、歴史教科書や歴史学科や歴史研究センターなどの表現に至まで全ての一般的な「歴史」という現代表現により相応しいと考えられると同時に、タイの「プラワティサート」という表現に類する用語をビルマが考案しなかったところにビルマの保守的な姿勢が窺われ興味深い。

本稿は東大 A・A 研プロジェクト「前近代東南アジアの歴史認識と価値観」へ池端雪浦主宰 V における口頭発表をもとに作成されたものである。

[註]

- (一) 一九八九年六月、原語国名のピーダウンズ・ミャンマー・ナイガンドー (Pyidaung-zu Myanma Nain-gan-daw) の対外呼称がそれまでの「ユニオン・オブ・ベータ (Union of Burma) から「ユニオン・オブ・ミャンマー」(Union of Myanma) に変更された。しかし、本稿では「言語」民族及び国名などの呼称は全て「長年馴れ親しんだ「ビルマ人」、「ビルマ族」、「ビルマ」を使用することとする。
- (二) は Than Tun 博士の発言による。
- (三) 王統史「ヤーザウイン」は、建国神話やジャータカ (釈迦過去世の物語) など仏典からの引用なども見られ、必ずしも、史実のみ扱っているわけではない。〔大野 1987:5〕
- (四) は Than Tun 博士の発言による。

[参考文献]

一 辞書・辞典

- 陳儒性 一九六二『模範緬華大辞典』(復刻版) 東京・東洋文庫
 Hout Sein, U 一九七八 *Myanma-Ingrik - Pali Abeikdan* [M-E-D] ("The Universal Burmese-English = Pali Dictionary")
 原田正春・大野 徹 一九七九『ビルマ語辞典』(第2版 一九九〇) 大阪・社団法人 日本ビルマ文化協会
 Judson's *Burmese-English Dictionary* [Judson] 1966 Rangoon: Baptist Board of Publication
Myanma Abeikdan Akyin - chok Vols. I-V [M-M-D] ("Burmese-Burmese Dictionary") 1978-1980 Yangon: Ministry of Education.
Myanma - Ingrik Abeikdan [M-E-D] ("Burmese - English Dictionary") 1993 Yangon: Ministry of Education.
 Childers, R.C. *A Dictionary of the Pali Language* 1974 Rangoon: Buddhist Sasana Council.
 Hout Sein, U *Pali-Myanma Abeikdan* [U Hout Sein] ("Pali - Burmese Dictionary") Vols. IV (1954-56) Yangon: Government Printing.
 水野弘元 一九七〇 (第2刷) 『バーリ語辞典』東京・春秋社。
Myanma Swe-soun Kyran [SSK] Vols. 1-15 (1954-76) Yangon: Myanma Naing-gan Bada Bryan Athin ("Burma Translation Association").
- ### 二 研究書・論文
- Blagden, C.O. 1936 *Epigraphia Birmanica* Vol. IV pt.1 Rangoon: Superintendent Government Printing and Stationary [EPB]
 石井米雄 一九八四『ボンサーワダーン』(王朝年代記) についての「考察」『東アジア研究』三二巻一号、pp. 22-33.
 大野 徹 一九八七『ビルマ語の年代記とは何か』『史録』第一九号、pp. 5-21.
 奥平龍一 一九九四『ビルマの仏塔信仰―その伝統と現実―』森 袒道編『南方上座仏教の展開と相互交流に関する総合的研究』文部省科学研究費研究成果報告書、pp. 10-19.
 Priakat Thamaing Sazan ("History of the Burmese Literature") Edited by Mahatiri Zeyathu 1905 Yangon: Thudhammawaddy Printing.

